

## 会員の広場



### シェアリング・エコノミー

濱田 義文（東京）

ロスアンゼルスで初めて噂のウーバーを利用した。ドジャーススタジアムに前田健太が先発した試合を観に行ったときのことである。球場へはどのようにして行こうかと思案していたところ、息子がウーバーを使ったらと、アプリをスマホにダウンロードしてくれた。

訛りの強い英語で話しかけてくる。目的地に近づくともーターを見ながらチップを計算しなければならなかった。

試合は八回になった。電光掲示板にウーバーは○ゲートに行くと案内がでる。前田の勝ちもみえたので、大混雑を予想して早めに引き上げた。乗り場は番号制になっており、Aの5にドライバーが待っているとスマホに連絡がはいる。専任のスタッフが押し寄せる人波に備えており、整然と誘導してくれた。

次の日もウーバーで郊外のモールに行った。フリーウェイのカープールという相乗り専用レーンを走る。車は高速を離れて住宅地にはいり、親子を拾った。まさに相乗り＝プールであった。

行き先を入力すると目的地までの料金が示される。待ち時間も教えてくれる。車種もドライバーの名前も写真もある。間もなく車が現れた。「ハーイ、モニカ」名前を確かめて妻と一緒に乗り込む。きれいでゴミひとつ無い。キャンディをすすめてくれる。広大なスタジアム駐車場への長蛇の車列を尻目に入場ゲートの一番近いところまで運んでくれた。支払いはクレジットで自動決済される。すぐにアプリはドライバーの評価（レイト）をきいてきた。

ふとニューヨークに駐在していたころを思い出した。車道にとび出し、イエローキャブを止める。ひび割れたシートに乗り込むとプラスチックのボード越しに行く先を告げる。

昨秋、上海に行ったとき、妻の友人と待ち合わせて食事に行くことになった。彼女はホテルの前に列んだタクシーには見向きもせず、スマホで滴滴出向（中国版ウーバー）をたのんだ。自家用車での運転は危険なので専ら滴滴出向を愛用しているようだ。スマホのクレジットが、米国と同様に個人の信用を裏打ちしている。

日本のタクシーは、親切で清潔で安全。そして現金決済、明朗会計である。だが「相乗り」や「白タク」は禁じられている。

ウーバーはシェアリング・エコノミーの典型である。モノやコトをシェアする社会、スマホひとつあれば何でも出来る世界が、二つの大きな国にすっかり根付いていた。